

## 日本健康教育学会誌の「査読」を査読する

高橋 浩之 (千葉大学教育学部)

刺激的なタイトルではあるが、最初にお断りをさせていただきたい。まず、奉仕の精神で大きな負担である査読を引き受けている査読者や編集委員にはいつも感謝と敬意の念を持っているということである。また、私自身も査読等における自分の対応を後で反省した経験があり、ここで書くことには自戒の意味があるということである。そのことを前提として、会員の皆様にも考えていただきたいことを述べる。

### 1 査読は研究指導の場ではない

1名の査読者の意見がA4判の用紙にびっしり5ページ以上になっていたり、原稿自体に細かな書き込みが延々とされている場合がある。

査読を引き受けながら、十分な読み込みもせずに簡単なコメントを返す査読者もいる中で、その情熱は模範的とさえ言える。しかし、その査読者は勘違いをしている可能性が高い。

そのような査読意見においては、ほとんど例外なく「ここは段落を分けた方がよい」とか「こんなことも考えてみたら」など、研究指導でやって欲しいと思うようなことが書かれている。

査読の本質はピア・レビューである。仲間としてお互いの研究をチェックし合う仕組みである。だから、新人がベテランの論文を査読してもまったく問題ないし、逆に自分の能力に自信を持っていても、投稿者を自分が指導している学生のように扱うことは許されない。

査読においては、細かいことよりも、投稿された論文が、健康教育学的に意義のある新しい事実を妥当な方法で示しているかを判断するこ

とが重要である。文章の読みやすさや考察の深まりは、投稿者が責任を持つべきものである。もちろん助言は必要だが、度を超えると正しいとも言い切れない自分の好みを投稿者に押しつけることになる。

掲載される論文の質をあげるための努力は必要だという意見もあろう。もっともである。しかし、それは査読とは別に考えるべきである。

### 2 査読は論争の場ではない

投稿者の問題意識に対して、たいした根拠もないのに「別な点の方が大きな問題だと考える」と固執する査読者やすでに掲載された研究結果などに対して「認めない」という態度をとる査読者がいる。そのように考えることは自由だが、論争はその論文が掲載されてから自分の論文や学会の場などで行って欲しい。自分の考えを押しつけ、研究成果を発表する機会を奪う権利は査読者にはない。

また、査読者の中には自分の批判力を披露するために査読をしているとさえ見える人がいる。例えば、質問紙調査の「いつも」という表現を取り上げ、「『いつも』は回答者によって意味するところが違うから信頼性と妥当性に疑問がある」などと言い出す。もちろん投稿者も反論は可能だが、そういう展開になると時間ばかりかかり、望んだ形での掲載は難しくなる。そのような査読者は、その批判力を自分の査読の仕方にこそ向けるべきではないか。

### 3 最後に

これまであげたことは、どの雑誌にも多かれ

少なかれ当てはまる。しかし、私は査読を受けた経験も査読を行った経験も数十回ずつあるが、本誌の場合にはムラが大きいと感じている。それは、本学会の歴史が浅く、本誌に投稿した経験を持ち本誌とともに育ってきた研究者が査読にかかわることが少ないからではないだろうか。だから、本学会の理念やこれまで掲載された論文のことが理解されないまま査読が行

われ、大きなムラが生ずるのである。

そのことにも関連して最後に言っておきたい。査読を引き受けるような研究能力のある人は是非自分の論文を本誌に投稿して欲しい。それが良い出来の論文なら、なおのことである。それこそが学会への最大の貢献なのではないだろうか。

会員の声に応えて

## 日本健康教育学会誌の査読：理想と現実のはざままで

東京大学大学院 神 馬 征 峰（編集委員長）

本誌では査読に関して、時に著者から激しい攻撃をうけ、時に感謝の言葉をもらっている。このようなやりとりは他の学術誌にもよくあることであり、学術誌の質の向上にとってかかせない要素である。今回会員の声として、高橋氏から厳しい指摘がなされたので、それに対して返答したい。論点は2つ。査読における研究指導の問題。次に査読における論争の問題である。

### 1. 本誌の査読は研究指導の要素を含まざるを得ない

生物医学系のジャーナルとして例えばNature誌への年間投稿数は8,000以上であり、そのうち90%は不採用とされる。私が副編集長を務めているAsia-Pacific Journal for Public Healthでは年間投稿数が約600。その半分は査読にまわらず投稿から1週間以内に不採用とされる。これだけ投稿数が多いと、あらかじめ絞られた論文に対して、内容そのものに査読コメントは集中しやすい。しかしこれは本誌にとっ

てはまだ理想像である。

本誌が目指している年間投稿数は50である。投稿されても、「研究指導でやって欲しいということが」、研究指導者によってなされていない論文が多い。年間の投稿数が多ければ、指導不十分とか文章が未熟とかいう理由だけで査読に回す前に不採用とできる。本誌ではどうか？残念ながら、現段階では、それは理想でしかない。少なくとも本誌に関しては、編集委員会からの指導なしに、一定の質を確保した雑誌発行を定期的に行うことは極めて困難である。そして、これは現実である。投稿数が増えるということがこの現実克服の一つの鍵であり、その意味で高橋氏の結論には大いに賛同したい。

### 2. 査読は論争の場である

次の論点にうつりたい。本誌では査読結果に忠実に応えようという著者が多い。ところが、査読者は神ではない。時には過ちを犯す人間にすぎない。それゆえ、査読結果には、査読者の明らかな誤解によるコメントが含まれることも

ある。その場合は、「誤解だ」と著者が反論して、査読者を説得すればよい。これは日常的な、論争以前の話であり、さほど珍しいことでもない。論争になりうるのは、誤解によらぬ場合。例えば、質問紙調査に関する「いつも」に関する議論は、その論文の限界を考察するうえで重要なポイントでありうる。反論があるのであれば、反論して、決着をつければよい。

査読者のコメントに対して著者は、常に従順である必要はない。査読者が誤っていると思えば、追加のエビデンスを提示するなどして議論すればよい。決着がつかなければ、編集委員会としては、さらに査読者を増やして、解決を目指すこともある。そういう査読には我慢がならぬ、という著者は、別の雑誌に投稿し、そこでの採用をめざせばよい。本誌はこの分野における唯一の学術誌ではない。

### 3. 最後 に

査読にムラがあるのは本誌だけではない。ランセット誌や英国医学雑誌 (BMJ) ですら、3ページにもわたる査読結果を書く査読者がいる一方で、全く同じ論文に対して5行くらいしか書かない査読者もいる。それは学会誌の歴史が浅いということとは無関係である。

ただし、本誌の問題点として、査読者の質の確保が困難であるということはいえる。学会誌によっては、Medline上に掲載されている査読候補者の論文数を調べ、客観的業績が一定数ある人にしか査読を頼まないというところもある。しかしながら専門分野が多岐に渡り、学術データベースも多彩である本学会ではそれが難しい。

最後の結論、「査読を引き受ける研究能力のある人には自分の論文を本誌に投稿してほしい」という見解に対しては100%賛同したい。

と。というものの100%は難しい。特に、より高い地位を目指す若手研究者にとっては、インパクトファクターの高い雑誌をまず目指したいものである。本誌としては、それが可能となるように、Medlineへの登録を目指している。それを可能にするためにも、会員からの投稿をこれまで以上に期待したい。編集委員会としては、個々の論文の質をあげるべく一層努力をしていくつもりである。

なお査読についてご意見のある方は、編集委員会事務局j-nkkg@eiyo.ac.jpへお寄せください。

---

学会主催セミナー開催のご案内

健康教育・ヘルスプロモーション  
論文査読セミナー  
～論文査読の質向上のために～

日 程：平成24年1月21日(土) 午後13時半～  
会 場：女子栄養大学 駒込キャンパス  
講 師：中村好一氏 (自治医科大学公衆衛生学教授)  
内 容：前半は中村先生の講義、後半は査読を巡ってのディスカッションを行う。より質の高い論文の査読をするための研修会として、論文査読者向けの内容を中心とするが、同時に、投稿者の立場からも、どのような点が査読のポイントになるかが学習できる内容とした。

プログラム、申込方法の詳細は、日本健康教育学会ホームページにて掲載いたします。 <http://nkkg.eiyo.ac.jp/>